



# 福井大学教育地域科学部の 地域参画型授業・教育プログラム

---

ワーク・ライフ・バランスを重視した地域社会の担い手づくりの試み

福井大学教育地域科学部  
2011年3月

## はじめに

---

福井大学教育地域科学部は、学校教員や地域のリーダーとして、学校やそれを取り巻く地域社会を支え、その将来を考え、行動するための力を養うことを目的とするユニークな学部です。そのために、この学部では、いわゆる専門知識を習得する授業に加えて、学校教育、地域科学の両課程を通じて、地域参画型の授業・教育プログラムを豊富に取り入れています。

このリーフレットでは、皆さんがこれから受講することになる地域参画型の授業・教育プログラムのいくつかを紹介しています。これらの授業・教育プログラムに共通する目的は、地域子どもたちや地域で活動する人・団体、公共機関の職員の人たちと触れ合いながら、地域の抱えるさまざまな問題を知るとともに、その解決の道筋や考え方を体験的に会得することです。さらに、いずれも、学生がチームを作り、一緒に考え行動し、企画を立てて運営する、また取組みの過程や成果を公表したり意見交換したりする、というように、学生が自ら主体的に課題に取り組むことを求めています。

実は、このような授業・教育プログラムは、皆さんに学校や地域社会が抱えるさまざまな問題を体得させると同時に、職種を問わず組織で働いたり組織を動かしたりする上で必要となる能力を身につけさせることをめざしています。

職場では、多様な人々と共に、また多様な人々を相手に仕事をします。そのためには、自ら人に働きかけたり、人の意見に耳を傾けたりしながら、自分の考えをまとめ、人と協力して行動する必要があります。この授業・教育プログラムを通じて培われる力は、そうした場で必ず求められる能力です。

さらにそれは、生活の場においても必要な力です。少子高齢化をはじめ住環境や住民生活をめぐる問題、自然環境保全や地域文化の継承・発展に関わる問題など、地域社会には課題が山積しています。こうした課題の解決のためには、行政やNPO、企業などの支援を利用しながら、住民自ら知恵を絞り、多様な意見の違いを乗り越えながらみんなが協力して当らなければなりません。「ワーク・ライフ・バランス」という言葉がありますが、地域参画型の授業・教育プログラムで身につける力は、「ワーク」においても「ライフ」においても求められる職業的自立や社会的自立の基礎となる力なのです。

このリーフレットで紹介されるもの以外にも、教育地域科学部には多くの地域参画型の授業・教育プログラムがあります。中には、「探求ネットワーク」や「ライフパートナー」のように、いずれの課程の学生も参加して単位を取得できる授業がありますので、積極的に皆さんが参加し取り組んでくれることを期待しています。



# I

子どもの目線になって考える

# 目次

## I 子どもの目線になって考える

- 1 探求ネットワーク  
— 子どもたちと共に創り上げる協働プロジェクト— ..... 2
- 2 ライフパートナー活動へようこそ！  
— 地域連携による不登校児・発達障害児への支援活動 — ..... 6
- 3 児童館企画実習  
— 子どもたちと学習文化活動をつくる — ..... 10

## II ひとと交わり、地域の文化をはぐくむ

- 1 E&Cギャラリーを主軸とした活動 ..... 16
- 2 地域課題ワークショップⅢ(国際文化系)と  
福井国際フェスティバル ..... 20
- 3 福井県文書館学生サポータープログラム ..... 24
- 4 地域の博物館と連携した博物館実習 ..... 28

## III 地域を知る・まちをつくる

- 1 学生発信！駅前プロデュース in FUKUI  
— 福井駅前のまちづくりを考え実践するプロジェクト— ..... 34
- 2 福井市東郷地区まちづくりに学ぶプロジェクト ..... 38
- 3 地域課題ワークショップⅡ(公共政策系)  
— 情報公開請求の試み— ..... 42
- 4 社会調査で探る地域課題 ..... 46

# 1 探求ネットワーク

## — 子どもたちと共に創り上げる協働プロジェクト —

### 土曜日の大学で

5～12月の土曜日、福井大学文京キャンパスにたくさん子どもたちがやってきます。そして、9つのブロックに分かれて、大学生スタッフとさまざまな活動を展開しています。自分たちで集めた材料で独自の紙すきに挑戦する子。仲間と人形劇のシナリオや舞台設定について話し合い、発表準備にのめり込む子。雑木林に探検に行って捕まえた虫について徹底的に調べる子。自分たちの独自の料理メニューを考案し、試作を重ねる子。街に出かけて、郷土の歴史や文化を自分たちの目で確かめる子。山にキャンプに出かけて、拾い集めた枝を使って独自の作品づくりに没頭する子。さらに、附属特別支援学校の体育館では、さまざまな障害を抱えながらもいろいろな遊びにひたむきに取り組む子どもたちの姿も見られます。これが福井大学「探求ネットワーク」に参加する子どもたちの、ちょっと変わった日常風景です。

毎回の活動の終わりには、その日どのようなことに取り組み、そこで何を学んだのかを振り返る時間が設けられ、子どもたちなりに自分に取り組んだことの意味を確かめています。そして、次回以降の見通しを持って帰ります。これが8ヶ月の間に何度も繰り返されます。

9つのブロックと4つの係（2010年度）

		係			
ブ ロ ッ ク	ふれあいフレンドクラブ	わ ー い （ ニ ュ ー ズ レ タ ー ） 係	広 報 係	管 理 係	運 営 係
	かみすき				
	それいけ!! 探検隊				
	ナチュラル・クッキング・パラダイス				
	人形げき				
	ひらめき☆理科				
	福井まちかど調査隊				
	もぐもぐ				
	わくわくキャンプ工房				

## 長期にわたるプロジェクトの展開

ただし、同じことの単なる繰り返しでは、人はすぐに飽きるもの。そこで、8ヶ月の間にいくつか山場が設けられ、活動に弾みが付けられています。

最も大きな山場は12月の「なかまつり」。これは仲間と祭を掛け合わせた呼び名で、子どもたちにとっては最後の大発表会。いわば探求ネットワークのフィナーレ。ここで8ヶ月に及ぶ活動の集大成が披露されます。決して中間祭ではありません。

中間発表会にあたるものは「ミニなかまつり」という名で7月に設けられています。最初の2ヶ月はこの「ミニなかまつり」を目当てに活動が進められます。ここで子どもたちは、自分たちが取り組んできたことの手応えをつかみつつも、それまでの取り組みに足りなかったものを課題として見いだしていきます。これが後の活動のバネになります。

12月の「なかまつり」前、子どもたちにとって最も思い出深い時間となるのが、夏休みのキャンプや合宿。親元を離れ、そして学校の教師もいないところで、所属学校も学年も異なる子どもたちが寝食を共にするだけでも強烈な体験ですが、そこに普段とは全く違う協働探究活動が加わります。ここから「ミニなかまつり」前とは全く異なる次元での展開が始まります。これがその後の活動のさらに大きなバネとなるのです。

このような形で大きく展開するプロジェクトであるため、その集大成となる「なかまつり」はまさに大フィナーレ。とてつもなく大きなエネルギーが集まり、大爆発します。この衝撃波は忘れたくても忘れられません。

「なかまつり」後はすぐに閉講式。もう一つのフィナーレです。これだけ強烈な体験を繰り返し続けてきただけに、8ヶ月間の振り返りと仲間との別れは涙なしでは語れません。そして、これが子どもたちにとって確かな経験となって、人生の重要な糧となるのです。

## 何が培われるのか

これら子どもたちの姿だけを見ていると、そこが大学であることを忘れてしまいそうです。でも、そこは確かに大学。大学生が学び、大人として力を培っていく場です。

探求ネットワークでは、活動の企画・運営、安全衛生や会計の管理、イベントの告知や広報、取り組みの報告等々、関係するすべての営みを学生スタッフが担っています。子どもたちが主体となったプロジェクトが長期にわたって展開する探求ネットワークですが、その活動を実際に支える主体は学生。この中で学生スタッフは、活動の支え方を具体的に学んでいきます。

I  
探求ネットワークの活動を通して学生スタッフが培っていく力として、経験者の間でよく知られているのが「企画していく力」「運営していく力」「協働する力」「共有する力」の4つです。



すでに述べたような探求ネットワークの活動を通して、子どもたちには、①ものごとをつきつめていくための「探求する力」、②自分が調べ考え感じたことを様々な人に伝え分かち合うための「表現する力」、③話し合い協力する場を通して新たな活動を「創っていく力」、④これらを互いに調整し合って運営していく「自治の力」の4つを培うことがねらわれています。これら4つの力を培える長期のプロジェクトを学生自身が構想しようとする中で、学生スタッフ一人ひとりが企画する力を鍛えていきます。

ただし、いくら高らかに企画・構想したものでも、それを実施にまで持ち込めなければ、ただの「絵に描いた餅」。そこで学生スタッフは、年間計画を見通して、自分たちが企画した活動を実際に自分たち自身で運営することに努めます。この中で、ものごとを運営するための勘所を学生はつかんでいくのです。

探求ネットワークのような大きくて複雑な取り組みは、一人ひとり独立した状態では運営できません。スタッフ同士が互いの役割を知り、活動状況を確認しながら、協働で活動を展開する必要があります。ここで学生は、協働の意義に気づくと同時に、協働することの難しさを体感するのです。

協働してプロジェクトを進めるためには、自分の状況を相手に伝え、相手の状況を知る努力が欠かせません。お互いの状況や考えを共有することが続けられていないと、必ずプロジェクトにひずみが生れます。一方で、お互いの努力や喜びを共有することがプロジェクトの発展につながります。学生スタッフは様々な失敗を重ねながら、共有することの意味も確かめていくのです。

これら4つの力は、どの時代の、どの分野の、どの活動にも必要となるものです。探求ネットワークの活動を通して、学生は実社会で生きていく術を磨いていくのです。

### 持続可能な発展を支えるもの

このようなねらいを持った探求ネットワークですが、取り組みだしたばかりの最初の頃は、なぜこのようなことをしているのか、活動の意味が分からなくなることがあります。完全に活動の意味が分かってから取りかかれれば、それに超したことはありませんが、時間は待ってくれず、なかなかそううまくもい

きません。でも、なんとなくうまく活動が進んでしまうことがあります。そこには、うまく進んでいる理由が潜んでいます。一方で、見えないところに大きな落とし穴があることもあります。そこで重要になってくるのが「省察 (reflection)」と呼ばれる営みです。

省察はいわば反省と考察を掛け合わせたようなもので、自分自身の取り組みを振り返って、その意味を問い直し、これまで気づいていなかった新たな視点を見いだしていく営みです。単なる反省とは違って、常に新たな展望を探ることにつながる、きわめて前向きな営みです。

子どもたちは活動日の最後、その日の活動を振り返って、自分たちの取り組んだことの意味を確かめ、新たな見通しを持って帰るということを先に紹介しましたが、学生スタッフも活動後、同じようなことを行っています。その日の活動で子どもたちは何を学んだのか。自分たちの仕掛けや支え方にどのような意味があったのか。より良く活動を展開させるために、これからどのような調整や準備が必要か。このようなことを学生スタッフは毎週ブロック会議で真剣に話し合います。

ただし、一回一回の短期的な振り返りでは気づけないことがあります。そこで探求ネットワークでは、長い活動サイクルの節目にラウンドテーブルを設け、普段よりも長く新しい目で、自分たちの取り組みの意味をより深く探ります。さらに閉講式が終わると、学生たちは準備期間も含めた1年近い取り組みを振り返り、子どもたちの成長を跡づけ、そして自分が何を学んだのかを記録にまとめます。その記録は、ブロックの中で、そしてブロックをまたいで検討され、何度も書き直されます。こうして学生スタッフは、普段は活動を進めるのに精一杯で見ることができていなかった新たな視点に気づき、自分たちの実践の展開をより深く見通せるようになっていきます。これが後の確かな展望につながっていきます。

この記録は報告書にまとめられ、ブロックの活動の展開とともに、その中で子どもたちの成長、そして、それを支える学生スタッフ一人ひとりの成長の足跡が読めるような形となります。この報告書は後輩たちに受け継がれ、長期にわたる活動で得られた経験が次の世代に継承されます。こうして探求ネットワークは、発展を持続可能なものになっています。

こうした幾重にもわたる協働的な省察のスパイラルが、探求ネットワークという実践コミュニティの持続可能な発展を支えているのです。

(附属教育実践総合センター／遠藤 貴広)

## 2 ライフパートナー活動へようこそ！

### — 地域連携による不登校児・発達障害児への支援活動 —

#### 学校に居づらい子どもに

#### 心理的支援・学習支援を行う

ライフパートナー活動とは、学校に居づらい子どもと大学生が交流し、側面から子どもたちをサポートする取り組みです。具体的には、教室、相談室、保健室、適応指導教室、そして家庭に出向き、不登校の子どもや発達障害を抱えて学習に遅れが目立つ子どもに、心理的支援や学習支援を行います。例えば教室で、学習の遅れが目立つ子どもの傍らで、その子どもの進度に合わせた個別の学習支援を行うこともあれば、相談室にいる子どもと他愛もないお喋りをしながら、その子どもが抱えている深い悩みに耳を傾けることもあります。活動場所や対象児によって、行う支援内容や方法に若干の違いが見られますが（Table 1 参照）、この活動が不登校の子どもへの学校復帰を目指すものではない、という点は共通しています。いっしょに遊んだり勉強したりする中で、子どもが心を開き、自信を持つ。学生がその援助者になるというのが、ライフパートナー活動の目的です。

Table 1 ライフパートナー(心のパートナー)の活動内容一覧

	活動場所	項目数(人数)	活動の具体例
学習支援 (70)	教室	38(43人中)	・授業内容についていけるように授業中に対象児童・生徒の側でサポートする ・授業内容とは関係なく、授業中に対象児童・生徒の興味・関心に添って個別支援する
	相談室・保健室・適応指導教室	27(40人中)	・個別学習支援(算数・国語、授業の復習など)
	家庭	5(13人中)	・個別学習支援(宿題のサポート、テスト勉強、テスト直しなど)
話し相手 (45)	教室	6(43人中)	・休み時間などの話し相手
	相談室・保健室・ 適応指導教室	29(40人中)	・おしゃべり(雑談) ・相談(進路、悩み、日常生活について)
	家庭	10(13人中)	・相談(悩み、学級復帰について)
遊び相手 (45)	教室	18(43人中)	・休み時間の遊び相手 ・教室に居られない時に別室(図書館や相談室など)と一緒に遊ぶ
	相談室・保健室・適応指導教室	21(40人中)	・トランプ、ゲーム、読書、創作活動、スポーツ、散歩、歌
	家庭	22(13人中)	・DVD視聴、ゲーム、散歩、スポーツ、創作活動、ペットと遊ぶ
他の児童・生徒との 係わりへの支援 (5)	教室 相談室・保健室・適応指導教室	5	・対象児童 生徒の問題行動(離席や授業の妨害、他児童・生徒を叩くなど)への対処。 ・対象児童 生徒の小グループでの活動を支援する
校内での活動 に対する支援 (10)	教室 相談室・保健室・ 適応指導教室	10	・清掃を一緒に行う ・給食を一緒に食べる ・クラブ・委員会活動の際の援助 ・下校を一緒に行う

※アンケート回収数は96名。

※活動場所の内訳について：教室での活動は43名、相談室・保健室・適応指導教室での活動は40名、家庭での活動は13名。

※項目数について：自由記述方式で得られた活動内容に関する記述について、活動内容1点ごとに1枚のカードに書き出した。カード総数は191枚であり、Tableの項目数( )に示した数字は、カード数を示している。例えば、「学習支援(70)」は、活動内容に関する自由記述から得られた191枚のカードのうち、70枚が学習支援に関する記述であったことを示している。

## なぜライフパートナー

### 活動なのか

心理的・発達的に何らかの弱さを抱えた子どもを支援することがライフパートナー活動の大きな目的ですが、この活動の目的はそれだけではありません。将来教師を目指す学生に、教師になる前に、特別支援を必要とする子どもや不登校傾向のある子どもとじっくり関わる体験を持ってもらいたい、と考えています。教師になってからこのような子どもと接する場合、即座に教師としての対応が求められますが、対応に苦慮して問題が長期化するケースが多々あります。またそもそも、教師になれば、一人の子どもとじっくり関わる時間はなかなかありません。学生の時期に、配慮された環境の中で子どもとじっくり向き合い、特別支援を必要とする子どもや不登校の子どもを深く理解し、子どもにとって本当に役立つ支援とは何なのかを考えてほしいのです。

子どもとじっくり関わる体験を通して個別支援の力量形成を図る。そして将来教師になった時に、クラス全体を見ながらも、一人一人の子どもに添った視点と併せ持つ。これが、このライフパートナー活動のもう一つの大きな目的です。

## 授業で学問的な意味づけを行い

### 理論と実践の融合を図る

ライフパートナー活動は、約3カ月を1サイクルとし、週に一回（計12回）、決められた曜日に2時間程度、子どもと時間を過ごします。中には、長期にわたって活動する人もいます。活動場所は、学級、相談室、保健室、適応指導教室、子どもの自宅など、ケースによってさまざまです。どのような子どもを担当するのかについては、適応指導教室が窓口となり、保護者や学校からのライフパートナー派遣申し込みを受け、学生と子どもの「対面の場」を設定します。この活動は、学生と子どもの1対1の付き合いが基本となるため、互いの相性を重視し、対面の場で合意が成立すればライフパートナー活動がスタートします。

一方、ライフパートナー活動は、「学校教育相談研究」という授業に組み込まれ、単位修得に必要な実習として位置づけられています。つまり、週1回活動を行う傍ら、週1回授業に出席します。授業では、理論と実践の融合を大切にしています。多くの学生は子どもと接する中で、迷いや悩みにぶつかります。その悩みや疑問を大学に持ち帰り、授業で報告し合い、共に考えるというケースカンファレンスを授業の中で重点的に行っています。子どもとの関わりをまとめて事例報告するというプロセス自体が、自分の実践を省察することになり、子どもとの次の関わりに生かすことに繋がります。また、さまざまな人の意見

I  
を聞いたり、他者の事例報告を聴いてアドバイスをしたりすることで、子どもを理解する視点が深まり、真に役に立つ支援の在り方を体得することにも繋がります。そのほか、不登校の現状や発達障害に関する最近の動向についての講義もありますので、ライフパートナー活動という「実践」と、授業の中で行う「理論（学問的な意味づけ）」がつながりながら身につけていくのです。



### 複数の目でライフパートナーをサポートする

ライフパートナー活動の中でわき起こってくる悩みや疑問は、ケースカンファレンスの場で語られるだけではありません。学生は、活動終了ごとにその活動記録をEポートフォリオにアップロードすることが義務づけられています。その記録を、かつてライフパートナー活動を経験したことのある大学院生や、適応指導教室のスタッフ、教員などが読んでコメントをし、相談に応じます。このようなメールメンター制度を通して、複数の視点から学生の活動をサポートしています。また、ライフパートナー活動を行う過程において、派遣先の学校の先生やスクールカウンセラーの先生、相談室の先生などと連携し、情報交換をしながら子どもを支援していく体制も出来つつあります。

このように、ライフパートナー活動は、学生—子どもという1対1の関係が基軸になりながらも、決して、閉じられた孤独な支援活動ではなく、多くの人に見守られ支えられながら行われているのです。

### 「大学生—子ども」という関係を最大限に生かす

「大学生という立場で何ができるのか」という疑問の声が上がる場合があります。しかし、大学生という立場だからこそできることがあるのです。教師—生徒、親—子どもなどの関係は、ある程度役割が決まっており、日常的な関係性に縛られてしまいます。例えば、学級や保健室、相談室で教師が生徒とのびのび遊ぶということはなかなかできません。また親も同様に、不登校の子どもに対して、本人が動き出すまでじっと待ち、本人のしたいようにさせてやるということはなかなかできるものではなく、どうしても「学校に行きなさい」と

言ってしまいます。しかし、大学生がライフパートナーという立場で子どもと接するとき、そこには教師や親、友達という役割はありません。一人の無名の存在（といっても、もちろん名前がありますが）として、子どもと出会うのです。「大学生—子ども」という関係は、なんら日常的な縛りのない、ただただ「人間と人間が出会う」というような、匿名性の出会いを可能にします。だからこそ、子どもが心を開き、自分が抱えている心理的・発達の課題に向き合い、それに取り組むという成長が起こるのです。大学生であるということが一見ハンディに思えることがあるかもしれませんが、「役割に縛られない自由さ」を最大の武器にして、真摯な態度で子どもと向き合い、深い信頼関係を構築してください。それができたとき、子どもは驚くほど変化していきます。

### 学生の声

#### 子どもの成長・私の成長

私は3年次で参加し、小学4年生の子どもを担当しました。初めのうちは、授業中に教室以外のところで子どもと話したり勉強以外のことをすることに戸惑いや不安がありました。その子の言葉遣いが乱暴で、冷たい言葉に悩んだこともあります。しかし、長く付き合ううちに、そんな言葉でしか自分の気持ちが伝えられないのだと分かり、言葉の裏にあるその子の本当の気持ちに気づくことができました。そして、一人一人の子どもに合った支援をするためには、既成の概念にとらわれず、ときには教室以外の場所で活動することも大切なのだと分かりました。子どもとの接し方は、担任の先生や大学の先生方に相談したり、学生同士でも話し合っって悩みや経験を共有するようにしています。活動を続ける中で、担当している子どもが泣いている友達に言葉をかけるといった優しい一面を見せるようになったり、いつも一人ぼっちだったのいつの間にか友達が集まるようになったり、何かをきっかけに、その子が変わっていくのを見ると嬉しいです。子どもの変化と共に、私自身も成長しているような気がします。

(学校教育課程3年 和田阿佐香さん)



(附属教育実践総合センター／廣澤 愛子)

### 3 児童館企画実習

— 子どもたちと学習文化活動をつくる —

地域科学課程生涯学習系では「地域課題ワークショップⅢ（生涯学習）」において、社会教育学、博物館学、芸術学を専攻する3年生を中心に、児童館の子どもたちを対象とした1年間にわたる企画実習をおこなっています。この授業を履修する学生でチームを組み、子どもたちが楽しみながら学べる企画を年間で7～8本実施していくのです。4月の授業開始と同時に、大学のキャンパスを出て地域を実践の場とした1年間の実習が始まります。

実習の場所は福井市旭地区の「さつき児童館」。学校が終わった子どもたちは児童館にやってきて、保護者が迎えに来るまで宿題をしたり、友達と遊んだりして時間を過ごします。この低学年から高学年まで含む約40人の子どもたちを対象に、1回につき1時間という枠のなかで何ができるか、企画チームは討議を重ね、教員のサポートのもと、アイデアを具体的な企画案にまとめあげ、そして実行します。

1年間の標準的なスケジュールは、前期5～7月のあいだに3回の単発企画をおこない、後期11～12月に、年末のクリスマス会を最終目標とした5回前後のシリーズ企画を実施するというものです。この実習は2001年に開始して以来10年が経過していますが、例として最近3年間の実習の概要を簡単に紹介してみましょう。

#### 〈2008年度〉ようこそ☆さつきシアターへ

前期は子どもたちとの関係づくりを念頭に、ゲーム、紙コップロケットづくり、歌&ダンスといった異なる内容の単発企画をおこないました。初回に「ようこそ！まほう学校へ！」と題し、魔女に扮した学生とともに子どもたちが変身ゲームを楽しんだ体験を活かして、後期は「ストーリーを演じる」ことを軸にすえ、7回からなるシ



物語の1シーンを撮影中

リーズ企画を実施しました。クリスマスを題材とした絵本を台本にして、子どもたちが登場人物に扮装、大学生と子どもたちで作った大道具や小道具を使って、各シーンを撮影し、その写真をもとにパソコンのスライドショーを作成。最終回は、子どもたちが台詞を読み演じながらのスライドショー上映会を開催しました。

### 〈2009年度〉いらっしゃい！さつきバザール☆

年間を通して「世界」をテーマにかかげて企画を構成。前期は世界の国々を知ってもらうことを目的に、国旗を使ったビンゴゲーム、世界の名所を描いた飛び出すカードづくり、そしてクイズを盛り込んだ世界地図すごろく遊びを実施しました。後期は7回で構成。子どもたちは3班に分かれて民族衣装を作り、最終回でそれぞれ「帽子屋」「服屋」「小物屋」を出店。店員役とお客役を体験しながら、それぞれ気に入った衣装や小物を買っては身につけ、バザールを楽しみました。



世界の衣装を身につけ、サンタさんを迎える

店員役とお客役を体験しながら、それぞれ気に入った衣装や小物を買っては身につけ、バザールを楽しみました。



新聞紙の帽子をかぶってエコ音楽隊出動！

### 〈2010年度〉

#### 結成！さつきエコ音楽隊♪

前期は子どもたちの興味をさぐりながら、自己紹介ゲーム、オリジナルかるたづくりとかるたゲーム、新聞紙を利用したエコバッグづくりの3回の単発企画を実施しました。後期のシリーズ企画は、前期の最後にとりあげた「エコ」をテーマとして4回で構成。子どもたちは6

I  
班に分かれてペットボトルや空き缶等を利用した楽器を6種類製作し、練習を経て、最終回では、3曲のクリスマスソングを歌いながら、オリジナル・エコ楽器の合奏を披露しました。

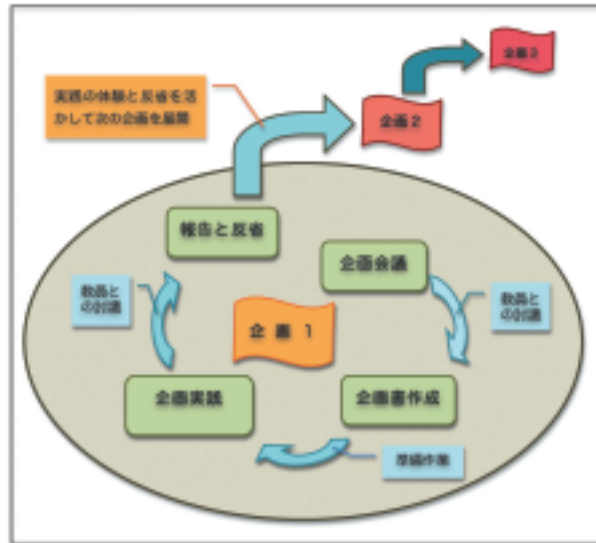
このような活動を授業として実施しているねらいは、同じチーム、同じ環境のなかで活動を積み重ねることによって、全般的な企画力を身につけること、そして、継続的な学習文化活動とコミュニティ形成とが相補的な関係にあることを実体験する点にあります。このことは、市民の生涯学習を企画・立案し支援する人材を育成するという生涯学習系の目標と連動する重要な特徴なので、少し詳しく説明しましょう。

### ■企画実践力を身につける

この実習では、児童館という場が設定されている以外はほとんど白紙の状態から、学生が自分たちで考え、話し合い、構想を立て準備し、企画活動を運営していくことが求められます。子ども向けのイベントなど簡単に思えるかもしれませんが、実際にとりくんでみると、魅力ある1時間をデザインすることはかなり難しい。核となるアイデアが定まっても、それを実際にどのような形で実現するかという点で、無数の課題が待ち受けています。やっとまとめた企画案も、プレゼンの場で教員から指摘を受け、修正しなければなりません。何度も話し合いが必要になります。こうして、チームで協力しながら、アイデアから企画デザインを導きだし、それを具体的な形へとまとめあげ実践する力が試され、また培われるのです。

### ■企画→実践→反省のサイクルを展開する

さらに重要なポイントは、このような企画立案・実践のプロセスを反復するという点にあります。そのサイクルを次ページの図に示しました。企画を実施すれば、計画どおりにいかなかったこと、予想外の出来事や失敗が必ず出てくるものです。この実習ではそうした体験や反省を踏まえて、次の企画立案へ臨むこととなります。これが1回限りの企画の場合、実際の取組みのなかで実感した課題等は、活かされる場がないまま単なる反省事項にとどまってしまうでしょう。しかしこのサイクルを継続していくことで、実践のなかでつかみとった問題や新しいアイデアを、後に続く企画活動のなかで活かし展開していくことができるのです。



児童館企画実習のサイクル

### ■実践をとおしてコミュニティがうまれる

継続的な活動は企画力の育成につながるだけではありません。4月には初対面でも、3回目の企画を迎える頃にはもう、子どもたちの名前はもちろん性格や癖なども自然と覚えています。児童館職員の方々との信頼関係もできてきます。学生たちは、子どもたちにとって「大学から来たお姉さん、お兄さん」から、「楽しく遊びながらいろんなことを教えてくれる仲間」へと徐々に変化します。このようにお互いが知り合い信頼しあうことで、一種のコミュニティが徐々に形成されていくと、活動そのものにも質的な変化が現れます。

当初はなかなか参加しなかった子どもが積極的に関わるようになったり、また子どものほうからアイデアや希望が出てくるようになる。学生のほうも、職員の方々のサポートを受けて、子どもたちの心により近づけるようになる。このような関係づくりがなされたなかで取り組むクリスマス会企画は、学生がすべて設計して持ち込むイベントではなく、子どもたちの自主性やアイデアを引き出す枠組みを学生がつくり、子どもたち自身が完成させる活動になります。前に挙げた3つの例からもわかるように、子どもたち自身が感じ、考え、チャレンジし、成長する、学習文化活動が展開されるのです。

ともに学びつづけることからコミュニティが生まれ、そしてそのコミュニティがさらなる意欲や可能性を引き出す。1年間の実習を終えた学生はこのことを実感としてつかむことができます。それは子どもたちの充実感あふれる笑顔と、自分たちがチームとして成長できたという喜びによってもたらされる、確かな感覚なのです。

(人間文化講座／澁谷 政子)



# II

ひとと交わり、地域の文化をはぐくむ

## 学生スタッフの活躍

では、具体的に学生スタッフはどのような活動をしているのでしょうか？ここで学生スタッフの多岐に渡る取り組みを紹介しましょう。

キュレーター部門(通称:キュレ部)とデザイン部門(通称:デザ部)のほか、展示をサポートするA班、B班、C班(各10名程度)が組織されています。企画の中核を担うのがキュレ部のメンバー。展覧会の企画立案、企画書の作成、広報資料(プレスリリース)の作成、展示方法の検討、学生企画展のギャラリートーク運営、展覧会レポート・展評の執筆、ニュースレターの編集、活動の記録作成、などなど。「企画-立案-運営-記録」の一連のプロセスを実際に体験しながら、総合的なマネジメント能力を身につける事ができます。(とにかく忙しい!)

ポスターやチラシをカッコよくデザインし、展覧会の魅力を伝えるのがデザ部のメンバー。広報資料作成段階で、直接作家の方々と打ち合わせを行う機会もあります。(ドキドキ)

時には、厳しいダメ出しが続き、何パターンものデザイン案を作成することも。作品の魅力を伝えるためには、アーティストの制作意図を十分に理解しておく必要があります、困難も伴います。そのほか、ニュースレターのデザイン編集も手掛けています。



学生デザイナーが作成した「石黒健治展」のチラシ。News Letterはアート情報満載。

3つの班に分かれた学生スタッフは、ローテーションで搬入・搬出をサポート。時には極めて高価な作品を扱う事も。緊迫した雰囲気の中展示作業を進めます。



左：アンパンマンの生みの親「やなせたかし展」の作品飾り付け。  
右：福井ゆかりの作家「小野忠弘展」。画面には三国の海で見つけた漂流物が貼付けられている。

## ニュースレター

2011年1月発行の『E&Cギャラリー ニュースレター[第5号]』(最新号)より、一部を紹介しましょう。学生初のトータルプロデュースとなった「大田ゆら展」。この学生企画展を主導した美術教育サブコース4年生の津嶋美穂さんの展覧会レポートです。

### 「大田ゆら展」レポート 津嶋 美穂

想像できますか？憧れの作家と直接コンタクトをとることを。

知っていますか？自分の思い描いた展覧会を開くことができた感動を。

2010年9月に催された『大田ゆら展-訪ねる場所-』は、E&Cギャラリー初の学生企画でした。

美術に興味がある方は誰にでも、1人は憧れの作家がいるでしょう。「この作家のこんな展覧会をつくりたい!」「この作家と直接コンタクトをとれたら…。」という企画者としての強い気持ちや憧れを胸にして、大田ゆらさんとの交流は始まりました。展覧会準備中に頂いた大田さんからのメールには、こう書いてありました。

「色がうまくいかなくてザッパーンと塗り…また描いています。」

たしかに会場に作品が並んだ時に感じたのは、色の流れでした。

どこか遠い国の、空のような冴えわたる青に、海のようにゆったりとした緑。それはキャンパスに幾重にも油絵の具をのせることで、生まれる色でした。

そして1つ1つの作品をじっくりとみて感じたのは、人の流れ。

見たものを鳥や雲になったような気分にさせるように、上空から俯瞰するような構図の作品には人が描かれている。人をこういった視線でみることは、あまり経験が無く、とても新鮮な感覚で人を再認識することができました。ギャラリートークでの

「人の顔の表情ではなく、全身から伝わる人の様子に関心がある。」という大田さんの言葉通り、人の顔が見えないのにその人の感情を感じ取ることができたのは不思議でした。また「意味のない人は描かない。」とおっしゃっていたとおり、「この人は、恋人と語り合っているな。」「みんなで集合写真を撮っているのかな?」と、どの人にも存在している意味を感じました。

本展では100号を超える大作品から、手でも包み込めそうな小作品と点数も多かったです。本展のために新作も発表してくれました。どの作品も、現代の若手作家の瑞々しさがあり、作品を目の前にしてもゆっくりと深呼吸が出来ました。

展覧会中には来場者の方から「学生の視点がよく分かる良い展覧会ですね。」との言葉をいただきました。作家の思いと企画者としての思い、この展覧会で表すことができたと思います。大田さん、本当にありがとうございました。



## 学生スタッフのメッセージ

ニュースレターより抜粋で、参加学生の「生の声」をお届けしましょう。

### 大村彩 福井大学2年

今年は大学の先輩や、卒業生の個展・作品に触れる機会がたくさんありました。展評を書くにあたり、たくさんのお話を聞くことができ、作家と近づくことができたと思います。

### 高田慎也 福井大学2年

今回は、コラムを担当しました。執筆を通して、キュレーターという仕事の面白さ、大変さを知ることが出来ました。少しでも多くの方に仕事について知っていただければいいと思います。

### 寺嶋健吾 福井大学2年

今回は坂口展のギャラリートークを担当させて頂きました。実際に足を運ばなかった方にこそ読んでいただきたいです。

### 岸下めぐみ 福井大学3年

私は今までギャラリーで開催された展覧会のチラシやDMをファイリングしているのですが、だんだん綴ってきた量が増えることが嬉しく思います。このファイルが全部つまる時が来るのが楽しみでもあります。

### 津嶋美穂 福井大学4年

現在私は卒業制作に携わっていますが、この2年間のなかで得たギャラリーでの経験が、自分にフィードバックされている気持ちです。作品を観たり作家さんのお話を

聴いたりして、自分の中に溜まっていたものを再び作品に込める…という感覚です。素敵な作品に出会えたときのあの感動を、私の作品からも与えることができたら…！と、日々夢みて制作しています。

### 吉田有希 福井大学4年

やなせたかし展のギャラリートークを担当しました。やなせさんといえばやはりアンパンマンですが、今回はそれ以外の作品ややなせさん自身の魅力もたくさん詰まっています。これを読めばますますやなせファンになること間違いなしです！また来場者数は過去最高を記録。たくさんの大人、そして子どもたちが、やなせさんの世界に包まれました。この贅沢で貴重な企画に立ちあえたことを幸せに思います。

### 重野加南子 福井大学大学院1年

今回、大島康幸展の展評を書かせていただきました。E&Cギャラリーもまもなく3年目に突入しようとしています。学生による運営も次第に落ち着いて行えるようになってきました。この2年間、学生にとってギャラリーを通じての出会いや学びは数え切れないほどあったように思います。3年目は、このE&Cギャラリーが生み出す価値のようなものを、もっと多くの人に知っていただかなくてはいけない大切な年だと感じています。

## 新メンバー募集のお知らせ

E&Cギャラリーでは、随時学生スタッフを募集しています。詳しい情報は< <http://eandcgallery.com/>>をご覧ください。

(芸術保健体育講座／湊 七雄)

## 2 地域課題ワークショップⅢ（国際文化系）と 福井国際フェスティバル

みなさんは、「福井国際フェスティバル」という催しをご存じでしょうか。(財)福井県国際交流協会が主催するこの催しは、毎年秋に福井県国際交流会館で開催されている国際色あふれるお祭りです。開催期間は1日だけですが、毎年多くの来場者(2010年は約6000名)が訪れるこのお祭りは、福井県内の外国人や子どもたちの間では馴染みのものとなっており、2011年で15回目の開催となります。

地域科学課程には「地域課題ワークショップ科目」という授業がありますが、その中の「国際文化系ワークショップⅢ(応用A、応用B)」では、この「福井国際フェスティバル」への参加を通して、フェスティバルの企画・運営業務を実地で学ぶとともに、フェスティバルに出展する展示物の作成に取り組んでいます。この授業では、学生が中心となって討論や作業をおこない、私たち教員はそのサポートやトラブルシューティングを担当しています。以下では、その具体的な活動についてご紹介しましょう。

2年次後期の「ワークショップⅢ(応用A)」では、その年のフェスティバルに当日ボランティアとして参加した後、翌年のフェスティバルへの出展に向けて具体的な作業に取りかかります。出展に関する作業は、文献資料や学内外での取材などから得た情報をもとに、展示のテーマと形式を検討するところから始まります。例えば2009年度は、「世界の飽食と飢餓」というテーマで、パネル形式での展示物を作成しました。2010年度は、「世界の結婚式」というテーマで、動画を活用したプレゼンテーション資料を作成しました。これらの作業の中で学生たちは、国際文化系の授業で取り組むにふさわしいテーマは何か、また、フェスティバルというお祭りの場で来場者に喜んでもらうためにはどのような展示方法があるのかという問題を並行して考えており、この二つの問題がつねに彼らの議論の中心にあるように見受けられます。学生が主体となって、国際文化に関する内容を扱うと同時に来場者の興味を引くテーマと展示形式を選択し、実際に展示物を完成させるまでの過程は、決して平板なものではなく、かなりの時間を要します。そのため、学生たちは授業以外の時間に集まって相談したり、作業をおこなったりもしていました。さらに、授業の最後には発表会をおこない、これまでの作業を振り返っての反省点や今後に向けた課題を、学生と教員が一緒になって考えています。

3年次前期の「ワークショップⅢ(応用B)」では、先の「ワークショップⅢ(応用A)」で展示物が完成していない場合は、5月までにそれを完成させます。そ

してその後は、福井県国際交流会館へおもむいて「福井国際フェスティバル」の企画・運營業務に従事します。具体的には、例年6月から国際交流会館で定期的におこなわれる、フェスティバルの企画運営委員会と部会に学生たちが委員やスタッフとして参加し、様々な仕事に携わります。企画運営委員会と部会は基本的には日曜日に行われ、その中で学生たちは、会館職員の方々やボランティアの方々と協力して仕事を進めていきます。全て学外でおこなわれるこれらの活動から学生たちは、学内での活動とはまた違った刺激を受けるとともに、社会的なルールに従って責任をもって積極的に仕事に取り組む社会人としての姿勢を学んでいきます。会館職員の方々にお世話になりながら、他大学の学生や、社会人の方々とフェスティバルの企画と運営について話し合い、それを実現させていく過程は、地域社会のなかでの社会活動、国際交流活動として大きな意義をもっています。参加した学生からは、年長者との話し合いのなかでときに自分の意見が通らないことがあったが、納得のいくまで話をすることができたことが社会勉強になった、という意見も聞かれます。



2009年度WSⅢAで作成した「世界の飽食と飢餓」の展示物

そして「ワークショップⅢ（応用B）」の締めくくりとして、国際フェスティバルの本番を迎えます。このフェスティバルは、「ワークショップⅢ（応用A、応用B）」を通して、これまで一年間かけて取り組んできた活動の総決算であるとともに、数多くの外国人に混じって国際交流を肌で感じることでできる貴重な場でもあります。会場となった国際交流会館では、地下のステージで、「ワールドフェスタ」と題された民族舞踊やパフォーマンスが繰り広げられ、1階には綿菓子、焼そば、金魚すくいなどの縁日で馴染みの食べ物や遊びを提供する屋台が立ち並び、惑星探査機「はやぶさ」に関する展示もおこなわれました。また2階には、クイズラリー「世界知ってQ!!」や民族衣裳を体験するコーナー、3階には、日本の伝統文化が体験できるコーナーや、世界の料理が楽しめるコーナーなどが設けられました。当日の会場は、まさに異文化の祭典そのものです。このような楽しいフェスティバルを体験すると、学生たちもこれまでの苦勞が報われたと感じるようです。経験できて良かった、楽しかったという声ばかりが聞こえてきますから。「ワークショップⅢ（応用B）」を終了した後に、自発的に次年度のフェスティバルにボランティアとして参加する学生も相当数います。また、こうした学外での実習で得たさまざまな経験は、留学、卒業研究、あるいは就職活動といった学生たちのその後の活動にも活かされることでしょう。





福井国際フェスティバルの様子

国際交流とは、たんに外国人と仲良くすることではありません。他者を知ることによって、初めて見えてくる自分の姿というものがあります。それは自分たちの殻に閉じこもってはい決して見えてこない、みずからの知られざる姿といってもいいでしょう。

みなさんも国際文化系ワークショップを通じて、国際交流フェスティバルに参加し、楽しく自己の再発見をしてみませんか。

「国際文化系ワークショップⅢ（応用A、B）」の授業の様子については、以下のホームページをご覧ください。

<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~k-isozak/WSIII/>

「福井国際フェスティバル」について詳しく知りたい方は、以下の(財)福井県国際交流協会のホームページをご参照ください。

<http://www.f-i-a.or.jp/>

(人間文化講座／磯崎 康太郎)

## 3 福井県文書館学生サポータープログラム

### 福井県文書館とは？学生サポータープログラムとは？

社会科の教員をめざす人は、歴史や地理、政治・経済、倫理など、それぞれの専門書を読みこなす力を大学で身につける必要があることは言うまでもありません。でも、それだけではありません。地域の資料や史料、統計などを用いたり、学校外の文化施設や地域の人々の知識・体験を利用したりしながら、効果的な学習指導を行う能力が不可欠です。こうした地域に密着した実践体験を身につけるための研修プログラムが、「福井県文書館学生サポータープログラム」です。

「福井県文書館」という名前を初めて聞く人も多いと思いますが、福井市下馬の県立図書館に併設されている県の施設です。文書館は、①福井県の地域史研究の基礎になる『福井県史』の編さんの際に調査・撮影された史料を中心とする20万点以上の古文書の整理・公開、②県庁が行政の必要に応じて作成した公文書のうち、歴史的に貴重な文書の保存・公開、を行っています。

何となく地味な公共施設のようにみえますが、福井県文書館は、このほかに、普及啓発事業として、古文書資料や論文雑誌・広報誌の発行、地域史に関する講演会や月例の館内展示、市民向けの古文書講座、小中高校生向けの出前授業、市町村の職員向け講座など、全国の都道府県や市町村の文書館・公文書館の中でももっとも活発な活動を行っている、身近にある意外とすごい施設です。少なくとも福井県の社会科の教員になりたいと思っている人は、県立図書館や県立・市立博物館などと共に、福井県文書館の利用が必須となるはずです。ホームページ(<http://www.archives.pref.fukui.jp/>)も充実していますので、ぜひ一度覗いてみてください。

さて、この「福井県文書館学生サポータープログラム」は、社会系教育の専門教科科目である「地域史実践研究」(半期2単位、継続受講可)として実施しています。基本的には、土日や休業期間に最低6日間、文書館で実践的な体験学習を行います。その内容は、大別すると以下の3つです。

- ① 文書館の業務の根幹である、古文書の整理・保存作業の補助
- ② 文書館で実施される講座・講演等への参加およびその準備作業
- ③ 文書館の普及啓発活動への参加

## 2010年度後期の活動

このプログラムは、2010年度後期に始まり、ようやく最初のプログラムが終わった所です。この半期で行った活動を紹介しましょう。

日 程	内 容
10月16日(土)	オリエンテーション 自己紹介、館内・展示説明、今後の日程調整等
11月13日(日)	第1回 ふくいの歴史資料にふれるⅠ 午前 目録カード作成体験、クリーニング体験 午後 県史講座Ⅰ「文久3年の龍馬と福井藩」準備・聴講
12月18日(土)	第2回 ふくいの歴史資料にふれるⅡ 古文書入門講座、目録カード作成・クリーニング体験
12月19日(日)	第3回 ふくいの歴史資料にふれるⅢ 午前 資料検索の手引、新聞検索実習 午後 新聞記事検索、後半プログラムの検討
1月15日(土)	第4回 ふくいの歴史資料を広めるⅠ 武生高校展示説明会のテーマ決定 テーマ関連資料検索
2月12日(土)	第5回 ふくいの歴史資料を広めるⅡ 午前 テーマ研究の継続・まとめ 午後 講演「他国修業－福井藩教育改革の軌跡」準備・聴講
2月13日(日)	第6回 ふくいの歴史資料を広めるⅢ 武生高校展示説明会の準備
2月18日(金)	武生高校「ふくいヒストリア⑤展示説明会」参加

プログラムの前半は、古文書の整理・保存という文書館の日常業務の補助を行いながら、古文書の現物を実際に目で見て触れる体験を通して、いわばOJT(オン・ザ・ジョブ・トレーニング：作業をしながら仕事に必要な知識や能力を身につけること)により地域史や地域史料に対する知見を深めることを主眼としています。

文書館では、県内の各家から寄託または寄贈を受けた文書は、殺虫処理やカビの除去のためのクリーニングを行い、文書一点一点の目録を採った上で文書保存を行います。学生は、まず、そうした作業に取り組みました。今回扱った文書は、明治初期に坂井郡の地租軽減運動に取り組み、後に衆議院議員に選出された坪田仁兵衛家の文書で、近世・近代の古書籍や印刷物を中心に、一つ一つの文書の形状や題目、著者、発行年などを調べ、目録を作成する作業を体験しました。クリーニングは、一冊ずつ刷毛で埃を落としていくという地道な作業で、保存という作業がいかに労力と時間を伴うものであるか、実感しました。



古文書を一点一点調べ、目録カードを作成する



武生高校での発表テーマの検討

プログラムの後半は、実際に文書館にある資料(古文書、統計資料、論文・解説書、写真・地図などの視覚資料)を用いて普及啓発事業に取り組むことを目標としています。

月例展示でのパネル発表など、いろいろなやり方が考えられますが、今回の研究発表会では、武生高校で行われている「ふくいヒストリア」(全5回シリーズ)の最終回として実施される、展示「2月7日は何の日? -ふるさと越前市・鯖江市」および研究発表会に参加することになりました。展示には、武生高校に関する新聞記事を検索して、その情報を提供しました。また、2月18日の研究発表会では、武生高校の1年9組の現代社会の授業で、同クラスの図書委員による「新聞で見る郷土の偉人 渡邊洪基」とともに、サポータープログラム参加学生が2つの発表を行いました。学生たちは、発表を行うに当たり、第3回～第4回に発表テーマについて検討し、その後は正規のプログラムの合間にも文書館で資料調査に取り組みました。

発表のテーマと概要は次の通りです。

### 1 入試と文集で見る武生高女

- ① 武生高等女学校(武生高校の前身の一つ)の沿革
- ② 昭和3年の入試問題から
- ③ 昭和2年の文集『わかたけ』
  - ・当時の女学生の道徳
  - ・当時の女学生のユーモア



武生高女の部子山登山

2 鯖江と武生の私鉄

- ① 福武線・鯖浦線・南越線の敷設
- ② 昔と今の駅
- ③ 何を運んでいたのか
- ④ 鯖浦線・南越線の廃線



旧鯖浦線・織田駅

当日は、高校と大学、そして福井県文書館が連携して学習を行うはじめての試みということで、マスコミ関係者も多数集まりました。高校生はクラスメイトを相手にリラックスしていましたが、学生の中には武生高校を昨年卒業したばかりという者もいてかなり緊張しており、10分～15分という短い制限時間でしたが、進行を急いで制限時間を下回って終わってしまいました。でも、生徒の前で話す初めての経験は、これからの教育実習などにきっと役立つことと思います。この武生高生と福井大生の合同発表会は、各紙で報道されました。



平成23年2月22日の朝日新聞の記事

実は、福井県文書館の職員の中には、県内の中学校や高校から派遣された社会科教員が何人もいます。地域の史料に触れ、史料を用いて市民や生徒に説明する体験を持つことは、福井県社会科の教員となって活躍するための基礎能力を養う貴重な機会です。できれば半年間にとどまらず、継続的に参加することを望んでいます。

(社会系教育講座／木村 亮)

## 4 地域の博物館と連携した博物館実習

教育地域科学部では1999(平成11)年の改組により、博物館学芸員資格を取得することができるようになりました。そのためには博物館学に関連する所定の科目を履修後、「博物館実習」を受講することになっています。福井市内にもさまざまな博物館、美術館等の施設があり、基本的に実習の内容を地域の博物館と連携して教育活動を行うことに重きを置いています。

### コラボレーション企画展

「博物館実習」はこの科目が開講された当初、福井県立博物館を中心に展開することになっていました。ちょうど2003(平成15)年3月に福井県立歴史博物館(改名)の展示場がリニューアルされ、学芸員と博物館実習生との共同企画を計画し、資料の調査から収集、展示、運営、イベントなどに関わることによって、博物館活動の一端をより理解させることをもくろんだのです。

我々の身近にあり学生でも入手できるものにスポットをあて、その素材を調査し、モノを集め、展示までを学芸員とともに、体系的に企画し内容を両者で検討しながらコラボレーション企画展として開催しようとの試みでした。

その年の「缶CAN展」(10月11日～12月14日)を例に具体的手順を紹介すると、年度当初実習生に、身のまわりにある形、デザインのおもしろさ、良さ、収集のしやすさ、古いものがすでに博物館に収蔵されている等々から展示できるテーマを考えよう、との提案をしました。6月には「缶」をテーマの最有力候補とし、1ヵ月後の学芸員との企画会議で決定、全体スケジュールをたて、4つのチームを設けました。缶の歴史や収集の範囲をまとめるカン識、資料収集や缶詰ラベルや缶切りなど館蔵資料の調査をするカン集、看板作成やポスター・チラシ等の広報印刷物にかかわるカン板、関連イベントの企画・運営を検討するカン遊。以上のチームに16名の実習生を振りわけました。

さらに夏休み前にはチームごとに事前に調べたことを発表した上で今後の日程を組み、各チームで連絡を取り合うこととしました。夏休み中、福井市内の缶工場の調査と資料収集、2回の全体打ち合わせし、9月末、資料の収集完了をめざしました。多数の方々のご協力のもとに集まった寄贈あるいは借用分、さらにその展示のために購入したディズニーのキャラクター缶200個をはじめ、収集した缶は2千点あまりにふくれあがりました。その中からデザインの良さ、形のユニークさという基準で展示するものを選定して、展示方法やジャンルを検討して、

つぎのような展示コーナーに分類、展示することにしたのです。

歴史カン：明治後期から昭和30～40年代にいたる時期の古い缶。

生活カン：菓子缶やキャラクターグッズの缶など現在のくらしのなかで使用されるさまざまな種類の缶。

世界カン：食材や菓子の容器を中心に世界33カ国の缶。

親近カン：缶切り、缶開け用品と缶詰の未使用ラベル。

違和カン：衣装缶、薬箱、スプレー缶、缶バッチ等一見して缶とは思えないような缶。

このような展示品の選択、クリーニング、実際の展示、終了後の撤去に至るまで、それぞれの作業段階に応じて学芸員から実習生に対しアドバイスをしてもらいました。10月1日から10日間の展示作業ではそのなかから結果的に約1,200点を展示しました。会期中には、6回のギャラリートークと3回の「缶で遊ぼう」のイベントを開催。その期間中約1万人の入館者があり、おおむね好評で共同企画自体についても理解されたようです。

翌2004(平成16)年の「魅惑の紙箱展 箱ワンダーランド」でも素材を紙に限定、展示コーナーを歴史、アート、形、外国製、ラッピングや特殊な用途としました。これに関連した取り組みとしてNHK福井放送局の「ほやほや情報BOX」及び「ゆうがたワイド・ゆう☆YOU☆福井」の番組に実習生が一連の活動を収録した「発信マイスクール・福井大学」のビデオを放映したこと、11月に開催された「第1回福井大学元気プロジェクトまつり」にアカデミーホールでミニ箱展を行ったことがあげられます。

引き続き2005(平成17)年の「ピン。展」も含め、このようなコラボレーション展は博物館側にとっても初めてのことであり、学生たちの発案、発想が新鮮な刺激を与えました。また多くの学生が口コミにより博物館に足を運ぶ契機ともなり、さらに市民が支える地域博物館の実現に少しでも前進できればと期待し、大学の教室から一歩出た教育活動を展開したものです。



「缶CAN展」の展示会場



缶で遊ぼうのイベント

## 特別展の子ども向け関連展示

2008(平成20)年4月、福井市立郷土歴史博物館学芸員から秋季特別展「福井藩と江戸」(10月4日～11月9日)の小中学生向けの関連展示を実習の一環としてかかわってもらえないかとの打診がありました。担当学芸員と実習生との打ち合わせを設定したのは、5月も半ばであり、秋季特別展の展示概要を聞いた上でフリートーキングを行い、次回までに学生側のアイデアをとりまとめさせることにしました。ただ同年度の実習生は17名と従来よりも多く、全員を投入するには人数的にも多く感じていました。ちょうどそのころ福井市自然史博物館でも秋のミニ展示「足羽山のどんぐり展」の企画が進行中で3名を関わらせることにし、準備作業の内容で越前から江戸までの旅を取り上げる「旅チーム」に8名、そして江戸の暮らしを考える「お江戸チーム」に6名を振り分け、チームリーダーをおいて体制を整えました。

6月上旬には事前に学生同士で打ち合わせした両チームの構想を聞いた上で、実習生にアドバイスをし、さらに7月には2回の会合で企画を練り直し、展示名を「江戸時代の旅とお江戸の暮らし」とし、以下の内容で展示の準備に着手することになりました。

### ●旅チーム－江戸時代の庶民の旅について紹介する展示

- ・越前から江戸へ－街道の旅－：宿場と名物・名所の紹介。
- ・旅の心得：4コママンガで表現。
- ・旅の道具：昔の旅の携帯品(財布・文房具・枕など)と現代のものとの比較。
- ・旅の服装：顔出し看板と服装の解説シートを作成。
- ・体験コーナー：徒歩、新幹線、バス、飛行機での4種類の東海道すごろく

### ●お江戸チーム－江戸庶民の仕事と暮らし、食事、楽しみを紹介する展示

- ・大木戸
- ・眼鏡絵：館蔵の西洋風の視覚的娯楽玩具ともいえる眼鏡絵と器具をもとに作られたキッドを体験コーナーとして設置。
- ・江戸のまち並み：手書きの江戸のまち並みを拡大コピーし、あらかじめ用意した人物を来館者に貼ってもらう。
- ・長屋と屋台：長屋の再現模型とファーストフードとしての寿司、天ぷら、そば屋の屋台模型を作成。
- ・東京の中の福井藩江戸屋敷のパネル。

9月になって夏の館務実習で学んだ実習の報告と2館での展示作業の進捗状況の打ち合わせを行いました。その頃から特に模型やパネル制作のための作業室として、1教室を確保し、準備作業を本格化させました。また関連催しの内容、開催日と回数、担当者もようやく決めました。このころパネル原稿のデータの入稿遅れと修正などで展示作業は月末にずれ込み、短期集中作業となってしまいました。10月4日からの会期中には関連催しとして「実習生とあそぼう！」を4日間、ワークショップ「通行手形と風車を作ろう」を1日開催しました。

実際に企画から運営まで関わった実習生は試行錯誤であったが、外部の組織との共同作業で一つの目的を達成するための、それぞれの役割と果たすべき作業の分担、意思疎通などさまざまな課題を残しながらも、なんとかカタチに出来たと思っています。

その後も同館で同様に秋季特別展の関連展示として、2009(平成21)年には「えい!やあ!刀!ドキドキ刀ワールド」、さらに2010(平成22)年「いざ合戦!城を攻略せよ」を実施しています。いずれも開幕の1年~半年ぐらい前からその準備にとりかかっており、長期戦での対応は大変であるが、展示の企画を通じて地域の博物館活動の一端を理解するとともに、実践的な企画力の形成に寄与するのではないかと。また大学が地域に目を向け大学教育と博物館との連携という観点からも、なんらかの地域貢献につながっていると思っています。

(人間文化講座/宇野 文男)



「江戸時代の旅とお江戸の暮らし」の準備



実習生と展示関係者



「えい!やあ!刀!ドキドキ刀ワールド」展の一部



「いざ合戦!城を攻略せよ」展示入口



# III

地域を知る・まちをつくる

# 1 学生発信！駅前プロデュース in FUKUI

## — 福井駅前のまちづくりを考え実践するプロジェクト —

皆さんは福井駅前についてどんな印象を持っているでしょうか。「活気がない」「空き店舗が多い」「統一感がない」「そもそも駅前に行く機会がない」…これらはすべて学生から出された意見です。福井駅前には福井駅西口開発や、地下駐車場、商店街の空洞化など数多くの問題がありますが、これらの問題を私たちはどれだけ真剣に考えているでしょうか。

このプロジェクトでは、地域の顔ともいえる「福井駅前」のフィールド・ワークをもとに、地元のまちづくり団体などと連携しながら、駅前活性化の具体的方法について、学生の視点で議論し、提案し、実践することを目的としています。身近な地域のまちづくり活動を通じて、地域に関心を持ち、そこにある課題を発見し、その解決に向けてワークショップ等を企画・実践・運営し、コーディネートする能力を身につけてもらうことが大きなねらいです。

平成22年度は、地域科学課程生涯学習系3年生を中心に、生涯学習系専門科目「社会教育計画Ⅱ」受講生による「福大EMP実行委員会」を組織し、以下のような活動を行いました。ちなみに「EMP」とは、「駅前プロデュース」と「Enjoy My Town」の二つの意味を込めた名称です。実行委員会はおおむね週1回の会議を重ね、福井市都市戦略部中心市街地振興課、まちづくり福井(株)、福井まちなかNPOなど、行政や市民団体との学習会を取り入れながら、福井駅前の現状について学習し、活性化のためのイベント「学生発信！駅前プロデュースin FUKUI」(10月24日(日) AOSSAにて開催)を企画しました。

実行委員会が福井駅前活性化のコンセプトとしたのは「歩きたくなる駅前」です。「ふらりと歩けば自然も歴史も人情も感じられる 温かな気持ちになれるそこには“福”が溢れている」。これは福井市が作成した「福井市中心市街地活性化基本計画」(平成19年11月)における、活性化の目標「1 訪れやすい環境を作る(出会い)、2 居住する人を増やす(出会い)、3 歩いてみたくなる魅力を高める(遊び)」のうち、3つめの目標にあてはまるものです。この「歩きたくなる駅前」というコンセプトのもと、イベント当日は、以下の三つの課題を達成できるようプログラムを作成しました。

- ①実際にまち歩きをして福井駅前の現状を知る。
- ②どうすれば「歩きたくなる駅前」にできるか、駅前プロデュースのプランを練る。
- ③自分たちが考えたプランを発表する。

◆「学生発信！駅前プロデュース in FUKUI」実施概要◆

【日時】 2010年10月24日（日）10：30－19：00 【場所】 福井駅前 AOSSA

【主催】 福大EMP実行委員会

【後援】 福井大学教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター

10:00 受 付

10:30 開 会 式

10:50 企画説明

「歩きたくなる駅前」というコンセプト、および今日のプログラムで達成してほしい三つの課題を参加者に提示

10:05 講演「福井駅前の現状について」

齊藤久美子さん（まちづくり福井株式会社）

福井市が取り組んできた福井駅前再開発事業や、駅前の風景の変遷について、映像を交えながら紹介していただいた。

10:30 参加者自己紹介

10:50 フィールド・ワーク「福井駅前プチツアー」（昼食を含む）

福井駅前の現状や魅力を参加者に知ってもらうため、6～7人ずつ10のグループに分かれ、実行委員・当日スタッフのガイドで新栄商店街、ガレリア元町、柴田神社、福井県庁、足羽川堤防沿い、E&Cギャラリーなどのチェックポイントを散策。

10:20 映像「福井城下めぐり」上映

（福井大学教育地域科学部「博物館実習」受講生制作）

10:30 討論会「みんなで考える“歩きたくなる駅前”とは？」

福井駅前プチツアーで得た情報をもとに「歩きたくなる駅前」というコンセプトのもと、福井駅前の活性化についてグループごとにディスカッション。学生の自由でユニークな発想を活かして実現可能なプランを作成。

10:00 報告会「みんなで提案する“駅前プロデュース in FUKUI”」

グループごとに駅前活性化プランを模造紙にまとめ、全員の前で発表。学生が提案したプランに対し、助言者がコメント。

10:30 閉会式・街活継続セレモニー

実行委員が作成した福井駅前のスライドを上映し、参加者全員で「街活継続宣言」を行った。

10:00 終了

当日は一般参加者として、県内の大学・高専の学生22名、県外の大学・大学院生21名、これに実行委員15名、当日スタッフ15名を加え、合計73名の学生が参加し、5～7名から成る10のチームに分かれて福井駅前のまちあるき、グループ討論、駅前活性化のプラン作成と発表を行いました。以下がその一覧です。福井への親しみを感じられるよう、チーム名には福井の特産品の名称を用いました。

学生が提案した活性化プランの内容は、「商店街」「駅前ツアー」「MAP」「空間づくり」の4つが主な構成要素になっています。また、新たな大型施設をつくるという提案よりも、既にある建物や商店街、街並みや自然を生かそうとする提案が多く出されたのが特徴です。

### 「学生発信！駅前プロデュースinFUKUI」駅前プロデュースプラン一覧

No.	チーム名	プランのタイトル	内 容	商店街	駅前 ツアー	MAP	空間 づくり
1	コシヒカリ	えきまえ de MAP 歩く→知る→集う	駅に歩くざMAPを設置、 口コミ式3Dマップの提案		○	○	
2	福井梅	福井駅前ツアー☆ いこっさ！	さまざまなテーマで学生向け 駅前ツアーを実施		○		
3	へしこ	魅力ある街づくり	アウトレットモールを目玉と する商店街の区画整理	○			
4	ソースカツ	そうだ!!西口へ行こう☆	西口広場を休憩・緑化・ アートの空間に				○
5	羽二重餅	女性が歩きたくなる EKIMAE	女子中高生が将来も来たく なる駅前に				○
6	越のルビー	私の行きたい商店街	商店街をエリア分けし、 駅から動線をひく	○			
7	ごま豆腐	Station of LOVE ～駅前で見つける愛～	年代別、駅前デート コースの提案		○		
8	おろしそば	知らぬなら 探させてみせよう商店街	新栄商店街を〇〇空間に、 シークレットMAPの提案	○		○	
9	焼き鯖	バーチャル福井!!	駅前の歴史などをガイド するiPhoneアプリの開発		○		
10	越前ガニ	休憩×アート ～まずはガレリア元町にベンチをおこう～	ガレリア元町の中央にベンチを 設置、歩いて休める空間に			○	○

※各チームとも、県内の学生・県外の学生を含む参加者4～5人と、EMPメンバー（実行委員1、当日スタッフ1）の6～7名で構成



10月のイベント終了後、約1カ月後の11月20日(土)には、駅前商店街によるセミナー「私たちで再開発！女性が提案するふくい駅前プロデュース」において学生の提案したプランを発表しました。このセミナーでは、普段まちを利用しているのは女性が多いにもかかわらず、県議会議員や市議会議員、行政の管理職など、まちづくりを含む地域の重要な政策づくりに関わっている女性が少ない現状を変えていくため、駅前の活性化の具体策に女性の声を反映させようという趣旨で、参加者を女性に限定して行われました。参加した一般の女性からは、「福井駅自体に自信が持てない。色んな方がテレビ番組等では意見を言うだけで何も実現していない。西口開発ではNHKやマンションを作るのではなく、街並みを整えて人々が来たくくなるような街づくりをするべき。」「成長した子どもたちが違和感なく駅前に来られるように赤ちゃんの頃からお母さんと一緒に駅前に来て慣れ親しむことが重要。若いお母さん達がベビーカーを押してでも来られるような女性に優しい駅前にする必要がある。」などの意見が出されました。

以上のような活動のフィードバックとして、実行委員会の活動のあゆみ、駅前活性化プラン、および行政や商店街、市民に向けた駅前のまちづくりのための提言をまとめ、『学生発信！駅前プロデュースin FUKUI 提言書』を2月に刊行し、10月のイベントの参加者、講師・助言者等の関係者、行政、商店街などに配布しました。

平成23年度は、EMPの活動に参加してきた生涯学習系の新3年生を中心に、学生が提案したプランを再検討し、自分たちで実現可能なプランについて内容をさらに具体化し、関係諸団体の協力を仰ぎながら、実現に向けて活動していく予定です。22年度に開催したような活性化プラン作成のための大きなイベントではなく、既に提案されたプランの実現に向けた活動となります。福井駅前をもっとよくしたい、そのために何か行動したいと考える人はぜひ、このプロジェクトに参加してください。

(人間文化講座／羽田野 慶子)



## 2 福井市東郷地区まちづくりに学ぶプロジェクト

### 東郷地区のまちづくり

「まちづくり」というと、中心市街地再生や駅前再開発などといった、商業の活性化とか賑わいの創出とかをイメージする人が多いと思います。しかし、本当に必要な「まちづくり」というのは、そこに住んでいる人たちが、自分たちの「まち」の現状の課題を自分たちで見つめ、将来に向けてみんなで考え行動する、という息の長い活動です。

福井市は、平成2(1990)年に「福井市ふるさとおこし42事業」として市内42地区に一律300万円を交付し、地区単位での「まちづくり」の推進に取り組みました。もっともお金をばらまいたからといって、「まちづくり」が進むわけではなく、一過性の取組みに終わったり、ごく一部の人だけが熱心にやったりといった地区が多いのですが、ごく少数ながら長期にわたって地区の多くの人に参加し、さまざまな取組みを進めている先進的な地区もあります。その一つが福井市の一乗谷朝倉遺跡の手前にある東郷地区です。この授業は、東郷地区における「まちづくり」に関連するさまざまな企画や会合に参加することにより、体験的に「まちづくり」を学ぶ中で、東郷その他の「まちづくり」実践に関する調査や、地域との連携事業企画の提案につなげていく試みで、地域科学課程公共政策系で2～4年次に受講する「公共政策演習Ⅱ・Ⅲ」の中の「経済学A」で実施しています。

東郷地区は、朝倉時代の城下町から近世には大野街道の宿場町として発展し、戦後は足羽町(昭和46年に福井市に合併)の役場が置かれるなど、典型的な在郷町でした。また里山を背後に置いて、豊富で質の良い水を利用した福井市でも有数の「おいしい米」の産地として有名で、造り酒屋も2軒あります。地区全体に足羽川から導水された用水路が縦横に行き渡っていますが、中でも町の中心を流れる堂田川は、平成10年に親水路として整備され、東郷地区のシンボルとなっています。

東郷地区では、平成3年に「東郷ふるさとおこし協議会」が設立され、住民へのアンケートやワークショップ、先進地視察などを開始し、長期的なまちづくりプランの策定に取り組み始めました。まちづくりの起爆剤となったのは、平成7年に始まった「東郷街道おつくね祭り」(おつくねとは、おにぎりのこと)と、堂田川の親水改修の完成でした。「おつくね祭り」は、毎年8月の土日の2日間、町民総出でさまざまな催しを企画、準備し、当日は福井駅前以上の賑わいを見せるほどになっています。また堂田川は地区のシンボルとなり、コンサートを

# 東郷ふるさとおこし協議会と 東郷地区20年のあゆみ



うらがまちづくり市民の集い

3月 うららの東郷発行  
5/29/31 うらがまちづくり市民の集い

1999 H10

3月 闘争書の暮らし発刊  
10月 ゴミカレンダー発行  
(公民館共催)  
おつくね倉庫竣工

1998 H10



1997 H9

推荐市景観認定団体報告会  
東郷地区合同新聞  
(こんにちは東郷) 発行

1996 H9

一木地区まちづくり交流会 (8月)  
一木倉庫竣工 (おつくね祭)

1996 H9

3/14 東郷街道ふれあいマップ発行  
ふれあいカレンダー発行  
11/15 まちづくりフォーラム



2000 H12

2/7 「こんにちは東郷」 知事賞  
夢プラン東郷地区委員会発足  
11/26 東郷ほっかほっか祭典  
(10月夢プランアンケート調査)

2001 H12

21世紀わがまち夢プラン東郷地区委員会  
東郷街道おつくね倉庫ふれあいセンター完成  
まちづくりスランの実施

2002 H12

H4P 総合計画発刊  
おつくね産物販売行  
堂田川ライトアップ (おつくね)  
市地境環境保全功労者



7/18 福井豪雨

2004 H16

住みかくなるまちづくり全国交流会  
(10/8-10) 一木地区振興会  
おつくね倉庫  
朝倉共進研ライトアップ



3/28 東郷総合事務所  
3/20 保の保の保園会チャリティ開催  
ふるさとセミナー「東郷の石仏」発刊

2005 H17

2003 H16

「おつくねのまち」  
朝報披露 (取組)



11/5 国土交通省  
全国地域づくり推進協議会  
会長賞受賞

2010 H22

大賞受賞 朝日新聞 朝刊

5/23 東郷植山ウォーク開催  
6/7 東郷植山ウォーク開催  
少年自然の家で記念植樹

7/29-30 伊豆と協働で  
「まんまる自然体験」 長治賞  
10/17 吉田をゆるしでつなごうに  
植山を育てる会参加

10/24 荏原白鶴生誕200年記念  
朝陽会・こめっ子キッズ紙芝居製作

2009 H21

高松市まちづくり賞



「体積の森」 開催

2008 H20

堂田川治水10周年記念式典  
おつくね祭で開催

10/15 青山家君由家復原  
互おつくね手助け募集  
10/13 分神社境内案内板設置

2006 H18

まきやま児童遊園竣工  
夢・創造事業  
新夢プランモデル地区に指定  
おつくね倉庫完成  
非常用貯水装置設置

2007 H19

3/17 東郷の案内板設置  
10/28 おつくね産物オーヴン  
10/27 植山を育てる会20周年  
植山林道整備事業完了  
竣工式典開催



「2011 東郷街道まちなみカレンダー」より転載



開催したり、通りに面した古民家の再生に取り組んだり、さまざまな活動を生み出す場とになりました。さらに小学生の農家民泊体験や、女性グループ「ちぎ(地祇)の会」による地元産品を使った食品づくりビジネスへの取り組みなど、多様な方向へと東郷のまちづくりは展開しています。

### 学生の取り組み

この授業は、平成21年度後期から始まりました。参加学生は、すべて県内出身者でしたが、いずれも東郷のことはほとんど知らない(そもそも自分の住んでいる場所と通っている学校、バイト先、そしてネットの画面といった「点」でしか世界を理解していない学生が実に多い。これは最近の大学教員にとって悩みの種なのです。)し、また田んぼでの作業体験もほぼ皆無でした。

そのため、まず東郷地区を歩いて自分の目でまちを見ることから始めました。平日の昼過ぎでしたので、「まちづくり」が盛んな地区にふさわしい人の賑わいを想像していた学生たちは、閑散とした町の様子に拍子抜けをしたようにも見えました。その後、東郷ふるさとおこし協議会の佐々木さんから話を伺うことを手始めに、東郷公民館を中心に開催されるさまざまな催しに参加しました。

12月19日には、工学部建築建設工学科の学生による東郷をテーマとしたまちづくり設計演習の提案発表に参加し、グループ毎に分かれた地区の人たちと提案学生との議論の場に教育地域科学部の学生も加わり、プレゼンを聞きながら意見交換を行いました。

年が明けた1月24日には、地区の子どもを対象に開催された俵づくり講習会とそば打ち体験会に参加しました。俵づくり講習会は、夏のおつくね祭りのフィナーレを飾る俵運びリレーで使う俵づくりのスタートとして毎年行われるもので、おつくね祭りへ向けた地区の意気込みを知ることができます。そば打ち体験会は、地区の大人と子どもが入り混じってそば打ちに取り組み、昼の試食会では打ち立てのそばと共に、地元名物旭屋の油揚げとトックリ軒のヒネ鶏足を堪能しました。昼からは、福井市都市計画課の職員による「福井市身近なまちづくり条例」の説明会に出席しました。

このような地区の行事への参加や、まちづくりに関係する講演会や交流会への参加は、不定期ですがその後も継続的に行われています。

平成22年度には、学生も東郷のまちづくりに加わろう、ということで学生同士で検討した結果、米粉を用いた食によるまちづくりができないかという話になりました。調理実習室を借りて米粉食品づくりに苦闘する中で、東郷の女性グループが「ちぎ(地祇)の会」を結成し、地産地消による起業をめざしていることを知り、彼女たちの活動への協力という形で、まちづくりへの参加を考え始めました。

6月には、ちぎの会の月例会として行われた、地元の米と酒を使った「酒まんじゅう」づくりに参加し、その際に、おつくね祭りにちぎの会が「あたらし屋」(堂田川沿いの再生古民家)で出店する予定を知り、そのお手伝いをする事になりました。

平成22年のおつくね祭りは8月7日・8日の二日間にわたって開催されましたが、学生は前日の仕込みの手伝いに始まり、当日の酒まんじゅうの製造と販売に交代で携わりました。「あたらし屋」は、祭りのメイン会場である越前東郷駅前通りから少し離れているため、ひっきりなしに客が押し寄せるといってはありますが、地元の子どもの活躍もあって、最後は完売となりました。ちぎの会は、その後、公民館での料理グループから脱して駅前に場所を移して将来の店舗化をめざしています。

秋からは、これまでの東郷でのさまざまな体験を活かして、自分たちの意見を東郷のまちづくりに反映させようということで、次の2つの視点から提案作りに取り組みました。一つは、1日100人程度しか利用がない越前東郷駅をまちづくりに活用するためのプラン作りで、さまざまな案が出ました。もう一つは、まちづくりの世代継承を考えるために、東郷の若者へのイン

タビューを通して、若者のまちづくりへの考え方を調査し、報告するというものです。東郷ふるさとおこし協議会の総会は毎年3月に開かれ、総会后には講演会等の催しが行われますが、今年の総会では、学生の提案・報告会が組み込まれ、学生のアイデアを踏まえた活発な意見交流が行われました。

「まちづくり」は決して華やかな活動ではありません。また、多くの方は仕事があるので、活動は夜と土日に限られます。小さな成功を連鎖的につなげることが「まちづくり」であり、そうした小さな成功の中に学生がうまく貢献することができれば、この授業に成果があったということになります。

(社会系教育講座／木村 亮)



酒まんじゅうをセイロで蒸す



アツアツの酒まんじゅうを包む



5個で650円になります！

## 3 地域課題ワークショップⅡ(公共政策系)

### — 情報公開請求の試み —

#### 地域課題ワークショップⅡの概要

地域科学課程では基幹科目として1年次生から4年次生まで「地域課題ワークショップ」Ⅰ～Ⅳを段階的に履修します。この科目は、その名の通りワークショップ形式で行われる科目で、教員による講義形式の科目とは異なり、特定の課題について参加者が自主的に議論や作業を重ね、さらに地域に出かけて行ってインタビューや調査等を行うという形で進められます。そのような自主的な議論、作業、調査等を積み重ね、最後に他の学生や教員の前で成果発表を行うことによって、課題に関する情報収集力や分析を行う力、そしてそこから得られたものをわかり易く表現して他人に伝える力（プレゼンテーション能力）を身につけることを目的としています。

このような目的のもとで、1年次前期には、ワークショップ型授業とはどのようなものか、そのイメージをつかんでもらうための導入的科目として、地域科学課程の学生全員が同時に履修する「地域課題ワークショップⅠ」が開講されています。それに続いて、1年次後期～2年次前期には、地域科学課程を構成する6系それぞれにおいて個別に開講されている「地域課題ワークショップⅡ」を選択的に履修することになります。

このうち、公共政策系で開講されている「地域課題ワークショップⅡ」は、系での専門的な学習・研究への導入として、地域社会を分析する上での重要な情報源について理解するとともに、実際に地域における様々な問題を調べながら、情報公開制度を利用して行政資料や行政文書について県庁や市役所等の行政機関に対して情報公開請求を試み、その経験を参加者が共有することを目指しています。

#### 授業の進行

平成22年度後期の場合、授業の進行は以下の通りでした。

10月6日：ガイダンス、班分け発表と各班のスケジュール作成

10月13日：情報公開制度についての教員による解説

10月20日：予算書の読み方についての教員による解説

10月27日：外部講師（市民オンブズマン福井）による情報公開請求に関する具体的な説明

11月17日：第1回各班中間発表と市民オンブズマンによるコメント

（この後、各班による県庁、市役所等への情報公開請求実施）

12月 1日：教室での一斉相談

1月12日：第2回各班中間発表

1月26日：パワーポイントの使い方とプレゼンテーションについての実習・講義

2月 2日：最終発表会

まず学期の最初に履修する学生を5名程度のグループに分けて班を編成し、各グループに担当の教員をつけます。(平成22年度後期の場合、5つの班が編制されました。)ただし、教員はあくまでサポート役に過ぎず、各グループの取り組むべき課題や調査方法をこと細かく指示することはありません。課題・問題の発見、必要な行政文書の調査収集、情報公開請求の実体験、その分析と経験発表は各班の学生が自主的に行います。

各班は10月から11月にかけて、授業時間には、国レベルでの情報公開法及び県・市町村レベルでの情報公開条例等の情報公開制度や、行政の関係する諸問題を追求する上で不可欠な予算書の読み方等を学んだり、情報公開制度を駆使して行政運営の透明化を実現することを目指している市民団体である「市民オンブズマン福井」のメンバーによる講演を聞いたりします。

それと並行して、各班は福井大学附属図書館や県立図書館郷土資料室にある福井新聞縮刷版をはじめとしたメディア情報やインターネットでの検索、また日常感じている地域の諸問題等について話し合いを進め、取り上げる問題を絞り込みます。さらに、実際に行政機関に出かけていってインタビューや資料の収集を行ったりもします。従って、各班は上記の授業時間以外にもしばしば自主的に集まって、ミーティングや各自の分担作業の進捗状況を確認したり、学外での活動を行うということになります。



このようにして班で取り上げる問題を決定し、どのような点について情報公開請求を行うかが固まってきた段階で、11月中旬に行われる第1回中間発表において、各班はその問題を取り上げるに至った理由、それまでの調査・研究の進展状況、予定している情報公開請求の内容等について発表を行います。その際に市民オンブズマン福井のメンバーや教員から出されたコメントやアドバイスを参考にして、その後、各班は実際に行政機関に対して情報公開請求を行い、1月上旬にはその後の進展について第2回中間発表で報告することになります。(情報公開請求に対して行政機関側から請求対象文書の存否や文書公開の回答が得られるまでには数週間かかることがあるため、この時点では請求結果が出ていないこともあります。)

この2回の中間発表を行うことによって、対象としている問題に対する認識をさらに深めつつ、情報公開請求の結果得られた文書の分析等を進めるとともに、パワーポイントを使ったプレゼンテーションの仕方等も学習しながら、2月はじめには最終発表を行います。

全員が一堂に会する授業はこれで終了しますが、授業を通して得られた成果については、発表会後さらに各班の報告書と班のメンバーそれぞれの個人レポートを提出することになります。各班の報告書は冊子形式にまとめられて保存され、翌年度の授業の際に後輩によっても利用されることになります。

### 平成22年度後期の調査課題例

平成22年度後期の授業において各班が取り上げた課題は以下のようなものでした。

#### 1班：「外国人と福井のまちづくり」

1班は福井の街中でも外国人を見かけることが多くなったことから、福井での外国のひとたちの状況や暮らしと、行政側の施策について調査分析しました。情報公開請求の対象として主として取り上げたのは、福井市多文化共生推進事業や外国人の市営住宅入居拒否問題で、地域レベルでの多文化共生をどのように実現していくかについて検討しました。

#### 2班：「福井市中心市街地活性化について」

2班は西口再開発問題をはじめとして福井駅周辺の再開発問題がニュース等でも取り上げられていることに興味を持ち、福井市の中心市街地活性化の方針について調べました。福井市役所等でインタビューを行い、すでに実施された再開発事業として一定の評価を行える段階にあるAOSSAについて情報公開請求を行いました。

### 3班：「就職困難者雇用奨励金について」

3班は「女性の雇用」というテーマを設定し、福井市が行っている母子家庭や障害者の就職支援に関する具体的な施策について調査しました。情報公開請求の対象としたのは、障害者や母子家庭の母等の雇用の促進を図るために設けられた「就職困難者雇用奨励金」や、これと連動した「特定就職困難者雇用開発助成金」で、その効果や妥当性について分析しました。

### 4班：「福井のがん検診に関する政策」

4班は近年その必要性が強調されているがん検診に関して、県や市町村がどのような取り組みをしているのかについて調べました。福井県健康福祉部健康増進課等へのインタビューを行った後、実際に事業を行っている福井市に対して、平成22年度の健康検診事業、女性特有のがん検診推進事業の予算要求書や歳出内示書を情報公開請求して分析を行いました。

### 5班：「福井市のバリアフリー事業について」

5班はバリアフリー事業の一環としての歩道整備が交通弱者にとって適切なものかどうかについて関心を持ち、歩道のバリアフリー化について調査分析しました。福井市道路課等での聞き取りを行った後に、福井市交通バリアフリー基本構想及びバリアフリー事業に関わる予算書、平成22年度歩道バリアフリー工事一覧表を情報公開請求し、事業の妥当性等について分析しました。

(地域政策講座：横井 正信)



## 4 社会調査で探る地域課題

このプロジェクトは、現代の地域社会が抱える様々な課題について、地域との協力関係や連携・共同をはかりながら、社会調査法を活用した調査研究を学生参加で行い、学生の地域課題への理解を深め、社会調査リテラシーを育成するとともに、調査研究の成果を広く地域に還元・発信していくことを目指しています。

プロジェクトの核になっている授業科目は、「地域課題ワークショップⅢ（応用：地域分析）」（A・B合わせて通年履修）という社会調査の実習科目です。このプロジェクトに参加する学生の皆さんは、必ずこの科目を履修して下さい。そのほか、社会調査や地域課題に関わる科目（スキルアップ科目「調査・データ分析領域」の各科目や地域分析系専門科目など）を履修していることが望ましいです。なお、上記のワークショップ科目を含めて、社会調査関係の科目を系統的に（7科目14単位）履修すると、「社会調査士」の資格申請ができます（詳しくは履修手引き参照）。

以下では、このプロジェクトでは実際にどのようなことを行っているのか、2010年度の取り組みを例に具体的な内容を紹介しましょう。

### 地域課題を学ぶ

2010年度に取り上げた地域課題は、「グリーン・ツーリズムによる地域活性化」です。現代日本の農山漁村地域の再生戦略の1つとして注目されるグリーン・ツーリズム（農山漁村での滞在型余暇・交流に関わる諸活動）について、実地調査を含めて、理解を深めるとともに、地域との連携・交流も進めようという目論見をもって、取り組みを行いました。

調査を行うといっても、いきなり現場に行き人に会っても何も調べることはできません。まず必要なことは、調べようとする問題や課題の輪郭を知ること

です。4月から始まった「地域課題ワークショップⅢ（地域分析）」では、最初の3か月間は、問題の輪郭を知るため、教員のレクチャーを含めて、様々な基本文献を輪読する演習形式の学習を行いました。文献学習では、グリーン・ツーリズムに関する入門書（写真）、全国的な状況や課題を扱った論文、そして調査地として予定していた越前市を含む福井県地域の動向などを学習しました。



その上で、7月に入り、旧今立地区を中心に越前市域で活発にグリーン・ツーリズム事業を展開している地元団体「ロハス越前」の事務局長田中滋子さんを訪ね、ロハス越前の活動について学生主体の詳しい聞き取り調査(インタビュー)を行いました。インタビューでは、これまで学んだことを踏まえて、質問項目を整序してインタビュー・シナリオを作成して臨みました。インタビューは録音させていただき、後日分担して文字に起こし詳細な記録を作成・検討しました。この訪問では、田中さんと教員との間で共同調査に関する相談も行いました。

### 地域との連携・交流

2010年度の取り組みでは「ロハス越前」と共同で、当地のグリーン・ツーリズム利用者に対する郵送アンケート調査を実施し、そのデータを分析・検討し、調査成果を共有することがプロジェクトの中心に置かれました。調査は、越前市でのグリーン・ツーリズム事業の今後の展開の参考にすること、そして大学での教育研究の基礎資料として活用させていただくことを目的として、共同で企画・実施したものです。

調査の方法やアンケートの質問項目などについて相談を重ねた上で、調査票の作成・印刷・発送・回収・集計といった一連の作業は調査実習の一環として大学側で行いますが、調査の成果については原データも含めて地元団体の方々





にお返しして役立てていただくという考え方です。

今回の取り組みでは、「ロハス越前」の主催で2011年2月11日に越前市もやいの郷・農楽園で行われたシンポジウム（テーマ「交流から定住へー若者が住みたくなる田舎の魅力ー」）に参加し、調査の概要報告を教員と学生とで行いましたが、これ

に対して出席者の方々から様々な発言があり、活発な議論が行われました。また、シンポジウム後の夕食交流会にも参加し、地元でグリーン・ツーリズムに取り組んでいる農家や県内外の農村地域に移住した青年などシンポ参加者の方々と交流できたのも参加学生・教員にとって大変有意義でした。



このプロジェクトは、今後さまざまな地域課題に取り組んでいく予定で、毎年今回のような形の調査や連携・交流を企図しているわけでは必ずしもありませんが、できる限り地域の方々や行政との協力・連携・共同を追求しつつ、活動を展開したいと考えています。

### 調査リテラシーの育成

このプロジェクトでは、地域課題の理解と並んで、参加学生の社会調査リテラシーの育成も目指しています。そのため、調査の企画・設計から報告書作成まで社会調査の全過程を一通り体験的に学習する1年間の実習プログラムを組んでいます。今回の場合は、実地体験として、前期に個別の聞き取り（インタビュー）を行い、後期には、郵送アンケート調査（調査票調査）の調査票作成・発送・回収・整理作業と、アンケート集計分析ソフトを用いた集計分析を、教員の指導を受けながら体験的に学習し、さらに、個人報告書の作成や現地での発表も行いましたので、調査リテラシーの育成の点でも実践的意義があったといえましょう。ちなみに、今年度の「地域課題ワークショップⅢ（地域分析）」の受

講生は、この科目を仕上げに必要な全科目を履修して、本学で初めて社会調査士協会から社会調査士の資格認定を受けました。

なお、今回の実地調査（郵送調査）を含めて、このプロジェクトの成果は今後、地域共生プロジェクトセンターのホームページ等に順次掲載し、調査に協力いただいた方々を含めて広く社会に発信・還元していく予定です。



(地域政策講座／伊藤 勇)

### ロハス越前・福井大学共同アンケート調査の概要報告

ロハス越前  
福井大学共同  
アンケート調査  
「越前から  
見た」  
報告書

2021年10月14日  
調査実施日：10月14日  
調査場所：越前市  
調査対象：越前市在住の20歳以上の住民  
調査方法：郵送調査  
調査期間：10月14日～10月21日  
調査人数：1,000名  
有効回答数：450名  
有効回答率：45%

### 調査の目的・方法

- **調査の目的**  
ロハス越前が推進している地域共生社会の実現に向け、越前市に「ローカル・イノベーション」を推進する観点から、越前市在住の20歳以上の住民を対象に、越前市に関する意識やニーズを把握し、地域共生社会の実現に向けた施策の立案に資することを目的とする。
- **調査対象者（対象者）**  
越前市在住の20歳以上の住民を対象とし、ロハス越前が推進している地域共生社会の実現に向けた施策の立案に資することを目的とする。
- **調査方法**  
アンケート調査（郵送）による調査実施
- **実施期間**  
2021年10月14日～10月21日
- **調査対象・回収率**  
1,000名（回収率：45%）
- **有効回答率**  
有効回答率：45%

※本アンケート調査の結果は、越前市に提供し、越前市が活用するものとする。越前市が活用する場合は、越前市が責任を負う。越前市が活用しない場合は、越前市が責任を負わない。

### ① 回答者（GT利用者）はどんな人たち？

- **年代（問1）**は、20歳代から70歳代まで幅広く分布（全体の調査者では60歳代がやや多く、全体の4分の1）
- **性別（問2）**では、女性が多め（全体の2分の1を占める）
- **住所（問3）**は、中野（39%）、道橋（36%）、高瀬（21%）の順で多い。

### ① 回答者（GT利用者）はどんな人たち？

- **職業（問4）**では、無職（29%）が多め、専業主婦や退職者も2割以上。高学歴・高収入（15%）、専業主婦・専業主夫（15%）
- **学歴（問5）**では、大学（40%）、高専（13%）の割合が多め。高専・大学進学率は、全体の2割以上が多いのが特徴。

---

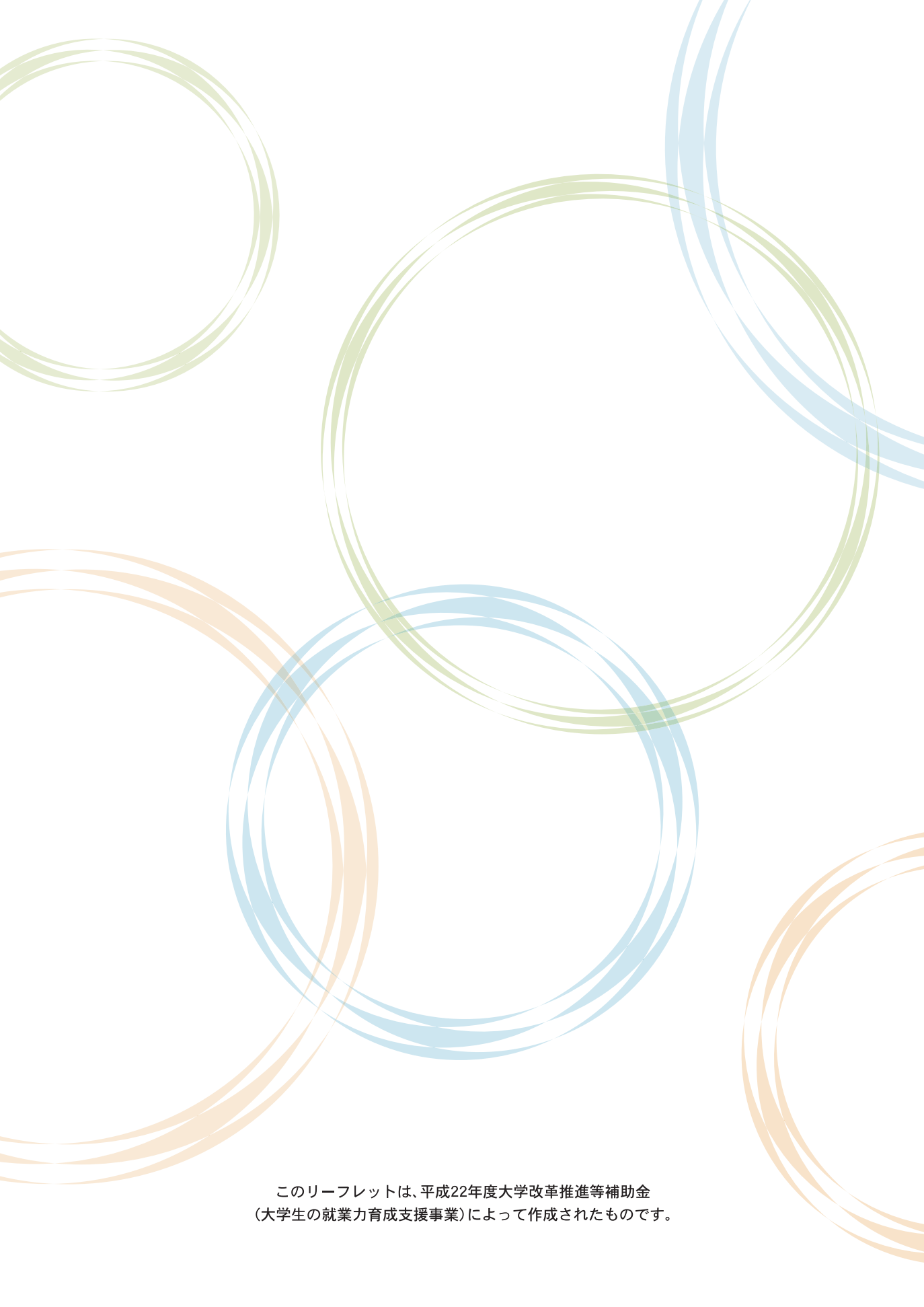
**福井大学教育地域科学部の地域参画型授業・教育プログラム**  
ーワーク・ライフ・バランスを重視した地域社会の担い手づくりの試みー

2011年(平成23年)3月25日発行

編集 福井大学教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター  
福井大学教育地域科学部大学改革支援事業等実施専門委員会教育推進部会

発行 福井大学教育地域科学部  
〒910-8507 福井市文京3丁目9番1号 TEL(0776)23-0500

---



このリーフレットは、平成22年度大学改革推進等補助金  
(大学生の就業力育成支援事業)によって作成されたものです。